

思いや意図をもたせる歌唱指導についての研究

－小学校1年生を事例として－

田端 浩多

Kota Tabata

奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

1. はじめに

小学校学習指導要領解説音楽編には、歌唱の活動について、「児童がこれまでに様々な経験を経て培ってきた感性を働かせて、自らの声で楽曲の表現を工夫し、思いや意図をもって歌うものである」¹⁾との記述がある。しかし歌唱学習の指導では、児童のイメージとは無関係に学習が進められることも多い²⁾。

こうした現状を受け、まず「思いや意図」とはどのようなものか、また小学生は「思いや意図」をどのようにもつのかを明らかにしたいと考えた。そしてそれを基に「こう歌いたい」という思いや意図を児童の中に築かせ、それを歌唱によって実現できるような歌唱授業を構想し、実践したいと考えるようになった。そこで研究の目的を、「歌唱の授業において、児童が思いや意図をもち、表現を工夫できるような授業を構想・実践し、その結果を検証することで、指導のポイントを導き出すことである」とし、研究を進めていくことになった。

2. 本研究の鍵となる概念の整理

まず、本研究の鍵となる概念を整理し、「思いや意図をもって歌う」はどういった姿なのかを導き出す。

(1) 思いや意図

「思いや意図」という語句は、小学校学習指導要領解説音楽編で示されている。そこで示されている内容を整理すると、「思い」は「歌詞の内容や曲想を感受することによって生まれる『こう歌いたい』という自分の考えや願い」であり、「意図」は「その思いを表すための方略」であると考えられる³⁾。

(2) 表現

小島(1998)は、「表現」を、「外的なものの働き掛けによって生じた自分の『内なるもの』を、音や言葉や色などを素材として具体的な形にして自分の身体の外に表すことである」⁴⁾と述べている。こ

の「内なるもの」は、イメージがはたらくことで起こる情動・感覚・感情からもたらされる⁵⁾。

上記2つの概念より、「思いや意図をもって歌う」とは、「歌詞や曲想からイメージを浮かべることで、『こう歌いたい』という考えや願いをもち、表現を工夫して歌うこと」であると考えられる。

3. 関連する先行実践研究の検討

森保ほか(2014)⁶⁾、加藤ほか(2007)⁷⁾の2つの先行実践研究の検討を行い、次の示唆を得た。

(1) 教材曲にイメージをもたせるには、歌詞全体を理解させることが必要である。

(2) イメージを表現させるため、グループで考えさせることは有効である。

上記の示唆を授業プランの構想に役立てる。

4. 授業プランの構想

授業実践は、小学校1年生の児童を対象に行う。そのため、それに基づいて授業プランを構想した。なお、低学年の指導内容には、「意図」が含まれていないが、低学年であっても、抱いた「思い」を基に表現を工夫できるのではないかという考えにより、構想した授業プランの指導内容には、「思い」だけではなく「意図」も加えている。

4.1. 構想した授業プラン

(1) 題材名

「ようすを おもいうかべて うたおう」

(2) 題材について

歌唱の活動は、ただ楽しく歌うだけではなく、歌詞や曲想からイメージを浮かべ、「こう歌いたい」という考えや願いをもって歌うことで成立する。そのため、児童にイメージをもって歌わせたいという願いを基に、題材を設定した。

(3) 教材名

《はる なつ あき ふゆ》(三浦真理 作詞・作曲)

(4) 教材について

四季がテーマであり、1番から4番にはそれぞれ春夏秋冬の様子が描かれている。歌詞には、小学校1年生の児童にとって、四季をイメージしやすい語が散りばめられており、四季の情景を思い浮かべるためのヒントが多く詰まった教材であると言える。

(5) 題材の目標

- ①歌詞や曲想からイメージを浮かべ、思いや意図をもって意欲的に歌う。
- ②表現への思いや意図を表すための歌い方を考える。
- ③表現への思いや意図をもって歌う。

(6) 指導内容

学習指導要領 A 表現 (1) 歌唱

イ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。

(7) 指導計画 (全4時間)

表1に示す。

表1 指導計画

時	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞に注目して、<はる なつ あき ふゆ>を聴き、メロディーを覚える。 ・4つの季節から連想されるものや、4つの季節に抱く気持ちを思い浮かべる。 ・イメージを浮かべながら、教材曲を歌う。 ・抱いたイメージを、ワークシートに記入する。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・4人グループになり、担当する季節を知る。 ・グループで、担当季節の歌い方を考える。 ・グループ毎に発表を行い、発表したグループに良かったポイントを伝える。 ・表現への思いや意図を、ワークシートに記入する。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい4人グループになり、担当する季節を知る。 ・グループで、担当季節の歌い方を考える。 ・グループ毎に発表を行い、発表したグループに良かったポイントを伝える。 ・表現への思いや意図を、ワークシートに記入する。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大歌詞を黒板に掲示し、それを基に、学級全体で4つの季節の歌い方を考える。 ・学級全体で、教材曲のイメージを浮かべながら歌う。 ・表現への思いや意図を、ワークシートに記入する。

4.2. 指導計画の詳細

4.2.1. 第1時

授業の冒頭で、初めて教材曲を提示する際、歌詞に注目して範唱を聴取させるため、まず、歌詞を提示せずに「どんな言葉が出てくるか、よく聴いてごらん」と伝え、教材曲を聴かせた後に発表させる。この活動により、児童は歌詞に興味をもつことができるものと考えられる。その後は歌詞を黒板に掲示し、筆者が歌詞を読み上げる。その際、児童にイメージをもたせるために、間をとりながら読んだり、「これはどんな様子かな」と問い掛けながら読んだりする。

続いて、歌詞のテーマである4つの季節の様子を思い浮かべさせることで、教材曲に対してイメージをもたせることとする。なお、小学校1年生の発達段階を考慮し、4つの季節の様子を同時に思い浮かべさせるのではなく、1番の春から順に取り上げる。

その後、浮かべたイメージが伝わるように歌ってみようと指示し、教材曲を歌わせる。

授業の最後には、抱いたイメージをワークシートに記入させる。このワークシートは、児童がイメージをもてたのかを把握するため作成した(図1)。

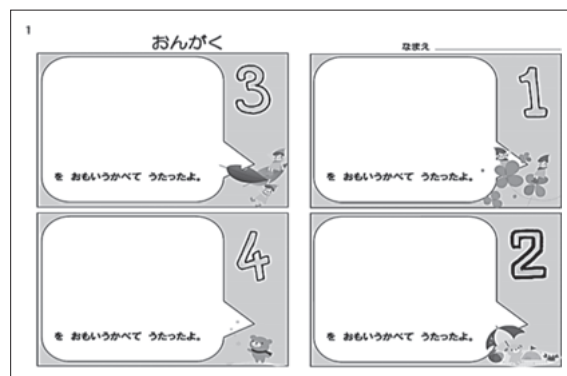


図1 ワークシート

4.2.2. 第2時

授業の冒頭では、第1時のワークシートの内容を筆者が読み上げ、浮かべたイメージを思い出させる。その後、座席の前後隣の児童で、4人1組のグループをつくり、季節を1つずつ割り振る。そして担当季節のイメージを児童間で交流させ、グループで表現を工夫するように指示する。グループ活動の後は、グループ毎に発表させ、聴いていた児童から良かったポイントを伝えさせる。これは、集中して聴かせるための工夫である。この活動は「ほめほめタイム」と名付け、興味をもたせるようにした。

発表後は、表現への思いや意図を、ワークシートに記入させる(図2)。なお、ワークシートは、四季の4種類分作成する。



図2 ワークシート

4.2.3. 第3時

授業の流れは前時と同様である。ただし、新しい季節の表現を工夫する視点を与えるため、グループに割り振る季節は、第2時と異なった季節とする。

4.2.4. 第4時

授業の冒頭では、前時までに思い浮かべた四季のイメージを振り返る。その後、拡大歌詞を黒板に掲示し、それを基にイメージを音楽で表現する方法を考える。具体的には、1つ1つのフレーズを取り上げて、「どうやって歌ったらいいかな」と問い掛け、児童から出た意見を学級全体で試しながら、よりイメージが伝わる表現を工夫していく。

その後は、みんなに伝わるように歌ってみようとして指示し、学習のまとめとして教材曲を歌わせる。

授業の最後には、表現への思いや意図をワークシートに記入させる。四季全てを扱うため、ワークシートは第1時のものと同一のものをを用いる。

5. 授業の結果

5.1. 第1時の結果

「思いや意図をもって歌わせる」ことに関わる場面を抜き出し、授業の流れに沿って詳細を述べていく。抜き出す場面は、「初めて教材曲を聴取させた場面」「季節の様子を思い浮かべさせた場面」「教材曲を歌わせた場面」の3場面である。

(1) 初めて教材曲を聴取させた場面

歌詞を提示せずに「歌の中に、どんな言葉が出てくるか聴いてごらん」と伝え、教材曲の音源を流すと、それまで落ち着かない様子だった児童も口を閉じ、集中して聴いていた。歌詞を聴き取ることができたのかを尋ねると、児童が口々に歌詞を呟くなど、教材曲に注目している様子が窺えた。

(2) 季節の様子を思い浮かべさせた場面

歌唱練習の後は、それぞれの季節から連想されるものや、それぞれの季節に対して抱く気持ちを思い浮かべさせ、教材曲に対してイメージをもたせようとした。すると児童はそれぞれにイメージをもち、イメージから季節への思いを膨らませているようだった(表2)。

表2 季節の様子を思い浮かべさせた場面

T ₁	夏といえばどんなものが出てくるかな。
S ₁	かき氷。
S ₂	(周りの児童が歓声をあげる。)
T ₂	いいなー。
T ₃	じゃあ、夏って、どんな気持ちになりますか。
S ₃	なんかな、プールに入りたくなる。
T ₄	なんでもかな。
S ₄	だって暑いからさー、冷たくなりたい。
T ₅	ほうほう、なるほどな。
T ₆	他に、言いたいことある人いますか。
S ₅	いつもバーベキューしたりしててな…
T ₇	いいね。どんな気持ちになるの。
S ₆	夏は楽しい！
T ₈	それはええなあ。

(3) 教材曲を歌わせた場面

教材曲にイメージをもたせ、深めさせた後は、思い浮かべた様子が伝わるように歌おう、と指示して歌わせた。しかし、授業の冒頭でメロディーを覚えさせるために歌った時と変容は見られず、強弱や明暗といった変化もなく、一本調子になってしまった。つまり、イメージをもつことができていても、そのイメージが即、歌唱を工夫することに結び付くわけではないということが考えられる。

5.2. 第2時の結果

第1時と同様に、授業の流れに沿って詳細を述べていく。抜き出す場面は、「グループで表現を考えさせた場面」「グループ発表の場面」「ワークシートに思いや意図を記入させた場面」の3場面である。

(1) グループで表現を考えさせた場面

活発に話し合っている様子のグループと、話し合いが進んでいない様子のグループがあった。前者のグループは、メンバー間でイメージを交流させ、試行錯誤しながら意欲的に表現を工夫していた(表3)。

表3 グループ活動の様子

秋を担当し、活発に話し合っていたグループの会話	
S ₁	どんな風に歌う？
S ₂	春はさー、ふわふわで、雲の上みたいな感じやん？ でも、秋はどんな感じなんやろうなー。
S ₃	みんな、声変えられる？
S ₄	えー、まあ。
S ₅	僕は変えられるで。
S ₆	「(優しく) あー」と、「(叫ぶように) あー」みたいに？
S ₇	ほんで、どんな風に歌うん。
S ₈	今って秋やんな。想像してみたら…。
S ₉	オレンジ色な感じ。もみじちゃうん。
S ₁₀	いい気持ちっていうか、なんていうか。
S ₁₁	(考えている。)
S ₁₂	なんかつけてみる。
S ₁₃	こうやって手つけたらいいんちゃう。
S ₁₄	「かかえて」のところは、 こうやって (抱えているように振り付けをする) やつたらいいんちゃう。

このグループは、春のイメージを参考にしたり、声の出し方を工夫したりして秋のイメージを歌で表す方法を考えていた。ただその方法が分からずに、単に身振りを考えるという結果に至ったようだ。

(2) グループ発表の場面

各グループがそれぞれに表現の工夫をしており、児童は楽しそうに他のグループの発表を聴いていた。「ほめほめタイム」でも積極的に良かったポイントが伝えられており、和気あいあいとした雰囲気の中で発表が進められた。

発表の内容としては、冬の寒さを表現するため全体を小さな声で歌うなど、音楽による表現を工夫し

たグループがあった。一方で、「どんぐりかかえ」の部分で何かを抱えているような仕草をするなど、単に身体の動きだけで歌詞の一部分を表しているグループもあった。

このことより、歌い方を工夫した経験のない児童には、音楽での表現を実現させるために支援が必要であると考えられる。

(3) ワークシートに思いや意図を記入させた場面

集中して活動していた児童がいた一方で、鉛筆が進まない様子の児童もいた。理由を尋ねると、文字で書くのが難しいようだった。児童の実情や発達段階を考慮に入れ、絵で描いてもよい、などの指示を行うべきであったと考えられる。

5.3. 第3時の結果

第3時では、前時の反省を生かし、当初構想していた内容に、「イメージを音楽によって表現する方法を考えさせる活動」を加えた。

では、前時までと同様に、授業の流れに沿って詳細を述べていく。抜き出す場面は、「イメージを音楽によって表現する方法を考えさせた場面」「グループで表現を考えさせた場面」「グループ発表の場面」の3場面である。

(1) イメージを音楽によって表現する方法を考えさせた場面

歌詞の1フレーズを取り上げ、音楽で表現することができないかを考えさせた(表4)。

表4 活動の様子

T ₁	歌詞…歌の言葉がありますね。
T ₂	例えば、春やったら、「わたげがふわり」の部分で指差しながら「(叫ぶように) わたげがふわり」って歌う？
S ₁	(「いや、違うよ」とばかりに笑っている)
T ₃	じゃあ、どんな風に歌ったらいいんやろう。
S ₂	「(ふわりの部分を優しく) わたげがふわり」
S ₃	ふわんと歌う。
T ₄	いいですね。ふわんと歌ってくれたねんて。
T ₅	(こりすがちよりの部分を指差しながら) じゃあ、秋は…「(叫ぶように) こりすがちよりの」って歌う？
S ₄	(「いや、違うよ」とばかりに笑っている)
S ₅	「(ちよりの部分を小さく) こりすがちよりの」
S ₆	ちよろりっていうから、小さな声で歌った。
T ₆	なるほど、そう歌ったんやな。

活動の際には、筆者があえて乱暴に歌うことで、表現を工夫する意欲を掻き立てることができたと言える。実際に、児童は優しく歌ったり小さく歌ったりするなど、それぞれに表現を工夫できていた。

(2) グループで表現を考えさせた場面

前時と比較して積極的である児童と、消極的である児童の両方がいた。グループ活動がスムーズに進むかどうかは、活動への慣れよりもグループの構成

員の人間関係が鍵なのであろうと考えられる。

(3) グループ発表の場面

前時に引き続き、各グループがそれぞれに表現の工夫をしていた。ただ、歌詞の一部分を身振りで表しただけのグループが前時よりも増えていた。授業の冒頭では、音楽によって表現する方法を考えさせたが、それはあまり生かされなかった。小学校1年生の児童は、音楽表現よりも身振りを工夫する方に移行しがちであったため、意識や興味を継続させるための環境づくりが必要であったと考えられる。

5.4. 第4時の結果

第4時では、前時の反省を生かし、当初構想していた内容を変更し、児童の「音楽表現」を引き出すために工夫をした。授業の冒頭では前時と同様に、イメージを音楽によって表現する方法を考えさせた後、児童から出た意見を、表現の一例として、黒板に掲示した拡大歌詞に書き込んでいった(図3)。

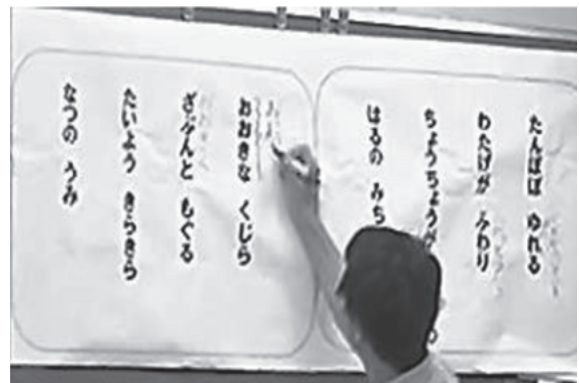


図3 児童の意見を書き込んでいる様子

思いや意図をワークシートに記入させた後には、歌唱させた。ワークシートは、「音楽表現」への意識を継続させるため、歌詞を印字し、フレーズとフレーズの間に書き込みができるようにした(図4)。なお、点線部で示している部分は記入例である。

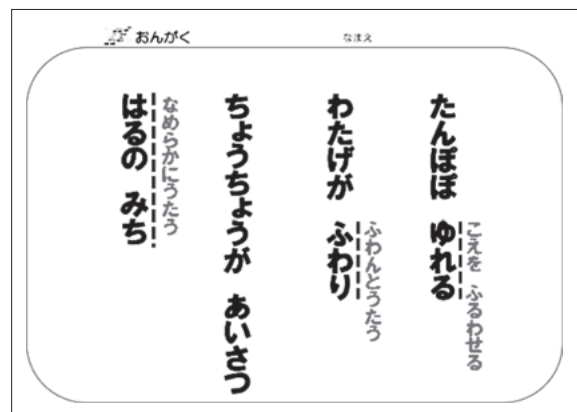


図4 改訂ワークシート(見本)

では、前時までと同じく、授業の流れに沿って詳細を述べていく。抜き出す場面は、「イメージを音楽によって表す方法を考えさせた場面」「思いや意図をワークシートに記入させた場面」「教材曲を歌わせた場面」の3場面である。

(1) イメージを音楽によって表現する方法を考えさせた場面

前時の活動内容と異なる点は、児童の意見を、黒板に掲示した拡大歌詞に書き込んでいった点である。児童は自分の意見が拡大歌詞に書き込まれると、歓声をあげるなど、楽しそうに活動していた。

(2) 思いや意図をワークシートに記入させた場面

ほとんどの児童が、集中して活動を行っていた。前時までには鉛筆が進まない様子だった児童も、印字された歌詞を手掛かりに、鉛筆を走らせている様子だった(図5)。

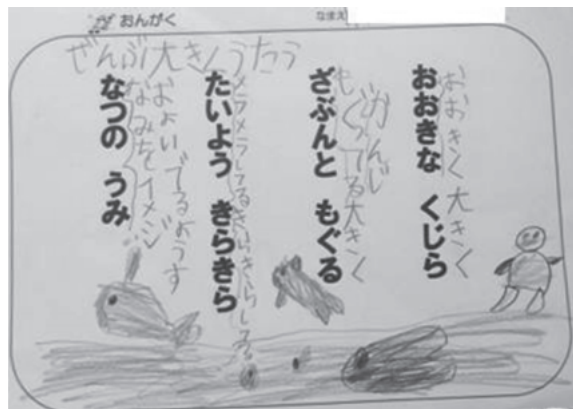


図5 児童が記入したワーク

(3) 教材曲を歌わせた場面

ワークシートに思いや意図を記入させた後は、様子が伝わるように歌おうと指示し、歌わせた。すると、四季ごとに強弱の差をつけていたり、歌詞に登場する形容語を工夫していたりするなど、第1時と比較すると、大きな変容をみることができた。

6. 結論

授業の結果を検証し、思いや意図をもたせるための歌唱指導のポイントを、次のように導く。

(1) イメージ・思い・意図の視覚化

イメージ、思い、意図は、児童の頭の中で創出されるものである。本実践を通して、低年齢の児童にとっては、たとえそれらを創出できていたとしても、すぐ忘れてしまったり、別の思考へ移ってしまったりする傾向があることが分かった。したがって、それらを音楽で表現する際に、児童自身に明確に意識させておく必要があり、そのために、イメージや思い、意図を、言葉や絵などの目に見える形によって視覚化させ、自覚化を図ることがポイントに

なると考える。

その時、それらを表すためにワークシートを用いることは有効である。本実践においては、第4時にワークシートに思いや意図を記入させてから歌わせた時、大切そうにワークシートを手を持ち、自分の思いや意図を確認しながら表現を工夫している児童の姿が見られた。このことから、歌わせる前にイメージや思い、意図を目に見える形によって、視覚化させておくことは有効であると言える。

(2) 思いや意図を音楽で表す過程において、身体による動きを取り入れること

小学校1年生は、思いや意図を音楽で表そうとすると、歌よりもまず身体の動きで表そうとする傾向があることが分かった。例えば、歌詞にある「おおきな」などの言葉に対して、すぐに動きを見せていた。それは「おおきな」というイメージを動きで表わそうとしているものであった。

当初は、歌詞の一部分を身振りで表すことは、音楽表現をさせる上で障壁となるものであると考えていた。しかし、このことは、小学校1年生がイメージを歌で表現させていく上で、重要なプロセスであると捉えられる。すなわち、1年生にとって、抱いたイメージ、考えた思いや意図を、すぐに音楽で表すことは難しいことであり、そのステップとして、身体を動かして、それを徐々に音楽表現へとつなげていくことがポイントであると考えられる。

(3) 楽曲全体を捉えさせるための教具の工夫

小学校1年生は、歌詞全体ではなく、そこで使われている語句そのものにイメージを湧かせたり、思いを抱いたりする傾向があることがわかった。楽曲に対する思いや意図とは、楽曲全体に対してのものであり、歌唱曲においては歌詞全体について捉えさせていくことが必要であった。それを実現させるために、本実践では、学級全体が共有できるためにも、歌詞全体を拡大して掲示する工夫を試みた。そしてその歌詞全体を見ながら、歌で表現する方法を考えさせた。これにより、児童は歌詞全体のイメージを浮かべ、歌い方を考えることができた。また児童から出た意見は拡大歌詞に書き込み、「音楽表現をすること」を意識させるようにした。

加えて、拡大歌詞と同様のデザインを施したワークシートを用いて、児童一人一人に歌い方を記入させることで、さらなる意識化を図った。授業実践においては、児童は音楽による表現を実現させることができていた。

(4) 表現に用いる要素の限定

音楽は、リズム、旋律、和声、速度、強弱などの諸要素によって構成されている。歌詞もまた声楽曲における要素の1つである。思いや意図を音楽で表現するということは、その思いや意図に照らし合わ

せながら、これらの諸要素を用いて形づくっていくことになる。

例えば、「『ふわり』の気持ちいい様子を表すためにゆっくりとしたテンポで歌う」「『ざぶんと』の力強い様子を表すためにクレシェンドして歌う」という具合に、である。

しかし小学校1年生にとって、複数の要素を同時に使って表現を工夫していくことは、難しいということが分かった。そのことから、指導にあたっては、思いや意図を表すための要素を1つに絞って注目させることが、児童の思考を焦点化させるためにも重要であるものと考えられる。例えば「どんな強さで歌ったら、あなたが考えた『わたげがふわり』の感じがでるかな」のような指示がポイントとなるだろう。

註

- 1) 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説 音楽編, p.15
- 2) 小島律子, 澤田篤子(1998) 音楽による表現の教育－継承から創造へ－, 晃洋書房, p.16
- 3) 前掲書, 文部科学省(2008)における p.23、p.38、p.54の記述より整理している。
- 4) 前掲書, 小島, 澤田(1998), p.2
- 5) 前掲書, 小島, 澤田(1998), p.3
- 6) 森保尚美, 圓城寺佐知子, 権藤敦子, 寺内大輔, 明道春奈(2014) 音楽科の特性に応じた思考を育むカリキュラムの開発(Ⅱ)－小学校低学年を中心に－. 学部・附属学校共同研究紀要, 42, pp.67-76
- 7) 加藤晴子, 逸見学伸, 奥忍(2007) イメージしたことや伝えたいことを起点とした歌唱表現学習－小学校における実践をもとに－. 岡山大学教育実践総合センター紀要, 7, pp.49-59

参考文献

- 井口太, 斎藤明子, 川北雅子, 内田佳江(2000) 表現におけるイメージの働き. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 4, pp.48-54
- 井坂雅浩(1992) 一人一人のイメージを大切にしたい音楽づくり: 5年生「ようすを表す音楽づくり」から. 研究紀要 広島大学, 平成3年度, pp.99-104
- 加藤晴子, 逸見学伸(2008) イメージしたことや伝えたいことを表現するための歌唱技能習得の試み－小学校における授業実践－. 岐阜聖徳学園大学紀要, 教育学部編47, pp.159-175

- 小林佐知子(2015) 音楽科授業における集団思考成立の条件－小学校1年生の「図形楽譜づくり」の場合－. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 19, pp.27-38
- 小島律子(2015) 音楽科 授業の理論と実践. あいり出版
- 国立教育政策研究所(2015) 小学校学習指導要領実施状況調査 教科別分析と改善点等 音楽. https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/05.pdf (参照日2016. 1. 31)
- 近藤円佳(2011) 思いや意図をもって表現するための指導の在り方－音楽を表現するよこびや達成感を真に味わえる授業展開－. 宇大付属中研究論集, 59, pp.34-39
- 教育芸術社(2015) 小学生のおんがく 1
- 森保尚美, 近藤知美, 奥本絢子, 権藤敦子, 寺内大輔(2013) 音楽科の特性に応じた思考を育むカリキュラムの開発－小学校低学年を中心に－. 学部・附属学校共同研究紀要, 41, pp.23-32
- 永田尚子(2004), 歌唱表現における生徒の音楽的思考の発展を促す学習過程の構成. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 8, pp.173-182
- 永田尚子(2006), 音楽表現活動における生徒の音楽的思考の発展. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 10, pp.108-109
- 中嶋俊夫(2011), 小学校音楽学習指導要領の理念「思いや意図をもって」をどう捉えるか－小学校教員対象の研修(神奈川県立総合教育センター主催)－. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 . I, 教育科学13, pp.111-128
- 岡本信一(1999), 音楽科教育における創造的思考に関する研究－音楽の解釈・表現を促すメタ認知の効果－. 教育方法学研究: 日本教育方法学会紀要, 24, pp.105-113
- 下中弘(1971), 哲学事典. 平凡社
- 田畑八郎(2008), 音楽表現の教育学～音で思考する音楽科教育～. (有) ケイ・エム・ピー
- 竹内敏雄(1978), 美学事典. 弘文堂
- 渡部尚子(2008), 音楽授業実践における「イメージの広がり・深まり」の実態と構造. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 12, pp.93-94
- 八代健志(2006), 音楽授業における「表出」から「表現」への変化の様相. 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育実践学会紀要, 10, pp.38-39